

おたくがおたくを研究するということ ～自実践における反省と考察～

しゃかもと

1. はじめに

a 概要

研究において、人と人が直接かかわって行われる参与観察 [1] や取材は、何を持って正確で十全なデータとするか、という問題に尽きない。というのも、研究者自身が否応なく取材対象に何らかの影響を与えてしまうからだ。研究者といえど、それは単なる記号の肩書に終始するものではなく、老若男女、多種多様な属性を持った人間である。その個性が研究対象に何らかの影響を与えてしまう可能性や、バイアスを掛けるフィルターになってしまうのだ。これは避けられる事案ではなく、研究者が背負って行かなくてはならない永遠のテーマなのだろう。その中でも我々のような己の所属する界限に対して考察を行う研究者の事を scholar-fan と呼称し、それ以外の研究者たちと対比して際立った利点と難点を産む。本論は、筆者が実際におたく界限に対して研究を行った経験に基づき、scholar-fan として採るべき方法論について考察するものとする。

b 執筆動機

本論を書くきっかけとなったのは、まさにおたく界限の中の一界限に対して実際に研究をした際の経験による。私はその研究に着手した時点で、幾つか趣味界限への研究手法について実践を試みた例や、それに対する反省と考察を行った論文があった。私はそれらの論文を読むまで、恥ずかしながら研究者そのものが取材対象や研究成果に与える影響という物に盲目であったが、このことを踏まえて研究を進めるうちに如何に困難で、研究者にとって終始付きまとう問題なのかということに気付かされた。

前述の論文はどれも、大まかにこうしたらよいのではないかという提案や、ここに気を付けるべき、という大まかなことについては考察していたが、まだまだ手法が確立されているとは言えず、寧ろ自分で考えて行い、その結果を蓄積していく過程にあった。故に私は手探りで手法を考え、実行していくこととなった。その結果、どれくらい研究の純粋性を保てたのかはわからない。しかし、そのような気づきを得たことによって、それ以前に比べて幾分かよい研究ができたのも事実であり、私が前述の論文によって気づかされ改善の為に苦慮したことを、更に後におたく界限を取材する方々に対して形として残さねばならぬと思い、本論を執筆させて頂くに至った。

c scholar-fan とは

マット＝ヒルズが提唱した用語であり、意味は趣味の当事者でありながら、己の趣味を研究する者である。ヒルズは彼の著作「Fan Cultures[2]」にて現出した概念であり、これを含めて趣味の世界を研究する存在には二通り存在する。scholar-fan と、もうひとつ fan-scholar だ。後者の意味は趣味として学術的方法論や理論を使用する者という意味であり、つまり前者は研究者で後者は趣味活動者ということになる。我々が採るべき立場は当然前者の scholar-fan になる。だが、両者の間の境界は非常に曖昧で、ともすれば scholar-fan は fan-scholar となってしまう、その研究の信頼性を落としてしまう。もし研究者として己の趣味の分野を解き明かしたいと考えるならば、通常のエスノグラフィ的手法 [3] ではなく、工夫を加えた新たな手法が必要になってくる。